

02

陶磁器

土器、陶器、磁器など4つに分類される、その違いは？

「陶磁器」は、土などを練り固め焼いてつくった器物の総称で、原料や焼成温度などによって、土器、陶器、^{せっき}磁器の4つに大別されます。

土器は、粘土を原料に、700～900℃くらいで素焼きしたもので、彩色する場合がありますが、^{ゆうやく}釉薬は使用しません。水や空気を通すため、植木鉢などの用途に向いていますが、食器や花瓶として液体を入れて使用すると染み出てきてしまいます。

陶器は、粘土を原料に、700～900℃くらいで素焼きし、釉薬をかけた後、1,000～1,200℃くらいでさらに焼いたもので、「土もの」とも呼ばれます。絵付けをする場合は、釉薬をかける前に行います。釉薬は、^{ちようせき}長石などの鉱物に、灰、金属などを加えたもので、それらの配合を変えることによって、さまざまな色や質感を表現することができます。また、同じ釉薬を使用しても、含まれている金属などが、酸素が十分にある状態で焼く場合は酸化（物質が酸素と化合すること）し、反対に酸素が十分でない状態で焼く場合は還元（物質から酸素が奪われること）するという違いによって、異なる色が現れます。釉薬をかけて焼くことによって、熱で融けた釉薬の成分が表面にガラス状の薄い膜をつくるため、土器に比べて水や空気を通しにくく丈夫です。日本の陶器には、例えば、笠間焼（茨城県）、益子焼（栃木県）、萩焼（山口県）、唐津焼（佐賀県）、薩摩焼（鹿児島県）などがあります。

磁器は、陶石、長石などの鉱物を粉碎したものを原料に、800～900℃で素焼きし、

釉薬をかけた後、1,250～1,400℃くらいでさらに焼いたもので、「石もの」とも呼ばれます。高温で焼くことによって、生地がガラス状に変化するため、水や空気を全く通さず、薄手につくっても硬く丈夫で、光にかざすと透けて見えます。絵付けをする場合は、産地によって釉薬をかける前に行うものと釉薬をかけた後に行うものがあり、後者の場合は絵付け後に800℃くらいでさらに焼きます。日本の磁器には、例えば、九谷焼（石川県）、京焼・清水焼（京都府）、砥部焼（愛媛県）、伊万里・有田焼（佐賀県）などがあります。

炻器は、陶器と磁器との中間のようなもので、長石などが含まれる粘土を原料に、一般に絵付けをしたり釉薬をかけたりせずに、1,200～1,300℃で時間をかけて焼いたものです。高温でじっくり焼くことによって、生地そのものに含まれる鉱物の成分や、窯の中で降りかかった灰が融けてガラス状に変化するため、水や空気をほとんど通しません。また、同じ窯で同時に焼いても、炎のあたり方、灰のかかり方などによって、一つひとつ異なる味わいの作品ができあがります。日本の炻器には、例えば、常滑焼（愛知県）、伊賀焼（三重県）、信楽焼（滋賀県）、備前焼（岡山県）などがあります。

陶磁器は一般に落としたりぶついたりすると欠けたり割れたりしてしまうため、子ども用の食器には割れにくい材質のものを選びがちですが、乱暴に扱うと壊れてしまうからこそ、ものを大切に扱う心を育むのではないのでしょうか。（平成22年5月）